白き鳥

夕日はとくかたぶきて、灰色の夜露、ここの岸よりかぎり知られぬ海の面にひろごりゆく。

あはれかの海のあなた、何ものか隠れたるものありて、われを呼ぶに似たり。ゆかまほし。ゆかまほし。舟あらばと思ふに、わがたてる岩のもとに、ひくき羽ばたきの音す。

打見るに、白く大きなる鳥、波のままにうかべり。つよくをかしげなるさま、われをみちびかんとする様なり。いざさらば其せにのせてゆけかし。

夕波たかくひくくうごく海の面、われをおひたる白き鳥は、霧の中にふかくふかくわけ入りぬ。

かくてしばし。やうやうに霧うすうなりゆきて、ゆくてに島あらはれぬ。かしこよ。かしこよ。かしこに何ものかありて、われをみちびくなり。何ものかこの鳥をつかはして、われをいざなふなり。とくかの岸にと思ふ。

近づくままに、まづ見ゆる島のいただき、ひの木に似たる木しげれり。磯はまさごしろじろと、うず月の光さしたるやうに、波はよせかへりてくだけたれど、かしましきひびきもなし。ここかしこに飛びかふ小さき鳥は、みな羽の色雪のやうなり。あたりはまことに物音もなう、心の中にしみじみとしみとほる静けさ。ああこの島、いかなればかく清きものもてみたされたる。いかなる人、いかなる幸ありて、ここには住むらむ。うらやまし。われらと思ひて岸にのぼらむとするに、足もとに細き声ありて、去れよ、去れよ、浮世の人、といふ。ひえわたりたる様なるしづけさの中に、この声、わが胸の底にひびく。

誰かわれをこばまんとはすると見るに、岩のはざまより、銀色の水さらさらとわきいでたる、それに声ありていふなりけり。

去れよ。うき世の人。ここは聖きところなり。うき世のけがれ残れる人の、来まじきところ、といふ。つらき世に思ひおくこともなし。何しかも其けがれのこらんといへば、否々、ここはたふとき一つの門をくぐりて、きよめられたる人のみのすみかぞ。とくとく去れかし、といふ。あはれそのなつかしの門はいづかたぞと問ふ。いづ方といふにしもあらず。

人のゆくところ、人のあるところ、いづこにも、つとそひてあるなり。されど時あり。そをくぐるべきをりにのみ見得るなり、とこたふ。今ぞ思ひあたれる。そは、そのたふとき門とは、死とよばれたるものなるべし。あはれその門、われにもそひたりやと、かへり見らるるここちす。あはれいつかけがれなくきよくなりて、ここのなつかしくたふとき島にはすみ得べき。あるいつかけがれなくならむ。ああ胸いたし。

白き鳥岸にそひてわれをまつに、水は絶間もなう、去れよ、去れよと声す。

底本：阪本幸男編著「橘糸重歌文集」短歌新聞社
平成二十一(2009)年十月十五日発行
初出：「心の華」第六巻第一号
明治三十六(1903)年一月一日発行
筆名：橘糸重子
入力：小林　徹
公開：令和四(2022)年九月二十五日

橘糸重【散文作品集】に戻る。